

張愛玲の中国文学史上における評価の変遷

—Change in the Evaluation of Eileen Chang in the History of Chinese Literature—

鈴木基子

I. 序

多様な経歴と愛を作品に反映させてきた作家張愛玲は、文学史ではどのような扱いを受けてきたのであろうか。張愛玲の文学史における記述について、日本で発表された先行研究には、2001年8月の河本美紀「台湾における張愛玲文学の受容と影響」¹⁾がある。これは大陸の張愛玲が、1960年代以降、台湾で人々の支持を得て、受容されてきた過程と影響を、経歴と国際関係、及び出版状況とともに2000年頃まで詳細に分析する。その後、2000年以降2015年までの受容と日本での研究について、筆者が触れた²⁾。台湾で50年代は大陸の現代文学が禁書扱いをされ、60、70年代は、国民党に有利になる文学でなければ認められなかったが、郷土文学論争では郷土派が強かった。90年代の「名著選出活動」の時は、国民党と民進党が、独立を絡めて論争を繰り広げた。張愛玲は有名で影響力があったが、台湾文学史ではあまり認められていなかった。2011年10月に陳芳明が『台湾新文学史』³⁾の中に張愛玲を詳細に記述し、台湾文学史に記載されるようになった。

日本ではまだ、中国文学史上における張愛玲受容の変遷について、正面から考察されていないようである。そのため、本論は、まず張愛玲の中国文学史上の評価を6期に分けて概観する。それから、関連書籍を東方書店(本の情報館)と、学術論文等をCNKI(中国学術文献網路出版総庫の中国期刊全文数据库)を母集団として、検索してヒットした件数を文学史の時期区分に当てはめて傍証とし結論を導く。張愛玲が排除と受容される過程を明らかにする。

今後張愛玲の評価は変化するのであろうか。2020年は張愛玲生誕100年を迎えようとしている。張愛玲の中国文学史上の立場について考察する必要があるだろう。

その受容過程を6期に分けて考えてみよう。時期区分は複数の文献を参考にし、筆者が時代背景と出版状況によって定めた⁴⁾。

1) 河本美紀「台湾における張愛玲文学の受容と影響」『野草』第68号、中国文芸研究会、2001年8月、pp89-115。

2) 鈴木基子「張愛玲と台湾文学史」『研究紀要』第82号、日本大学経済学部、2016年10月、pp1-31。

3) 陳芳明『台湾新文学史』聯經出版事業股份有限公司、2011年10月。

4) 刘知萌「文学史中的张爱玲——从1949到2009」『华中师范大学研究生学报』第17卷第3期、2010年9月、pp85-87。／杨玉清「张爱玲研究综述」『文学界(理论版)』2010年10期、pp110-111。／许子东「张爱玲的文学史意义」『读书』2011年12期、pp135-140。／中国の政治経済関係、兩岸と米国を巡る国際関係、張愛玲の生涯、メディアの影響、作

II. 張愛玲の中国文学史上の評価の変遷

1. 中華民国期：デビューしてから中国が成立するまで（1942年から1948年まで）

1937年から始まった日中戦争は長期化し、1940年に汪精衛政権ができる。1941年12月に日本が真珠湾と香港を攻撃し、太平洋戦争が勃発した。それまで上海にあった共同租界が姿を消し、日本が英米と戦争状態になった。子供時代や中学時代にも小説執筆の経験があった張愛玲は、1940年代初頭に、彗星のごとく躍り出た。1943年に「沈香屑：第一炉香」「心経」「傾城之恋」「金鎖記」「封鎖」が雑誌に掲載され好評を博した。小説集『伝奇』が1944年8月に出版され9月に再版され、散文集『流言』が同年12月に出版された。翌年1月に早くも再版及び3版されたように⁵⁾、急激に人気が出てデビューした作家であった。

張愛玲の出現は文壇に衝撃を与えた。1944年に傅雷（迅雨）の「論張愛玲的小説」⁶⁾がでて、譚正璧が「論蘇青及張愛玲」を書いた⁷⁾。

傅雷（迅雨）は「突然あらわれ、ほとんど奇跡のようである。この空虚で現実味がない言葉以外、読者が意見を表したことがない」⁸⁾と述べる。傅雷（迅雨）は『金鎖記』を称賛し、「私たちの文壇で最も美しい収穫のひとつ」⁹⁾と評価した。「評論界の張愛玲に対する期待はとっくに通俗小説作家の範囲を超越していた。《連環套》が連載されると、傅雷は彼女を批判して言うには『こんなに浮ついた調子や、旧小説のくずのような語句は、現在の鴛鴦胡蝶派や黒幕小説家でさえも、悪い風俗としてすでに使用しないのに、ここににわかに現われているのは、奇跡のようではあるまいか』」¹⁰⁾と述べて揶揄した。その本音は、張愛玲は鴛鴦胡蝶派の作家よりも優れた才能を有していると暗に称えている。

1944年の譚正璧の「論蘇青及張愛玲」には、張愛玲は蘇青と比べると、思想が明朗でなく、作品の雰囲気も重苦しく女性を描写する、と記す¹¹⁾。張愛玲は「多方面の教養がある芸術家で、絵画に造詣が深く、音楽を好み、文学では、古い文学遺産を活用することに優れている」「新旧文学の混合で、新ら

品の復刻と出版状況、発掘作品の出版等を考慮して、時期区分を行った。

5) 邵迎建『伝奇文学と流言人生』御茶の水書房、2002年10月、年表より。

6) 楊玉清前掲「張愛玲研究綜述」、p110。／迅雨「論張愛玲的小説」『萬象』第3巻第11期、1944年5月。／迅雨「論張愛玲的小説」子通、亦清主編『張愛玲評說六十年』中国華僑出版社、2001年8月、pp55-70。

7) 楊玉清前掲「張愛玲研究綜述」、pp100-111。／譚正璧「論蘇青及張愛玲」『風雨談』第16期、1944年12・1月、pp63-67、pp2405-2409。

8) 迅雨前掲「論張愛玲的小説」『張愛玲評說六十年』、p55。／迅雨（傅雷）「論張愛玲的小説」陳子善編『張愛玲的風氣：1949年前的張愛玲評說』山東畫報出版社、2004年5月、p3。

9) 王宏志「張愛玲与中国大陆的現代文學史書寫」劉紹銘、梁秉鈞、許子東編『再讀張愛玲』濟南・山東畫報出版社、2004年5月、p251。／迅雨「論張愛玲的小説」『張愛玲評說六十年』、p62。

10) 劉知萌「文學史中的張愛玲—從1949到2009」『華中師範大學研究生學報』第17卷第3期、2010年9月、p85。／迅雨前掲「論張愛玲的小説」『張愛玲評說六十年』、p67。

11) 譚正璧「論蘇青及張愛玲」『風雨談』第16期、1944年12・1月、pp63-64、pp2405-2406。／譚正璧「論蘇青及張愛玲」陳子善編『張愛玲的風氣：1949年前的張愛玲評說』山東畫報出版社、2004年5月、pp41-42。

しいものと古いものの情緒が混在するのが、作家の特殊な風格である。」¹²⁾と述べる。反帝国主義半封建主義を掲げる五四文学運動の理念と張愛玲の作品は大きく異なる。張愛玲は『伝奇』と『流言』によって一般大衆の読者を得ただけでなく、研究の分野でも注目されるようになる。だが、日本占領下の上海で花開いた作家であったため、終戦とともに漢奸（売国奴）の汚名を着せられてしまう。

張愛玲は、1945年11月出版の司馬文楨編集『文化漢奸罪惡史』（上海曙光出版社）に、文化漢奸として名前が取り上げられており¹³⁾、その存在が批判されていた。張愛玲は、夫胡蘭成の影響で、日本に協力した悪者と他者から見られていたのである。しかし、実際に収容所に送られることもなく、うわさに過ぎず、文学活動は行っていた。

このように張愛玲は、40年代初頭に急激にデビューして、多くの読者を得て人気を誇り、研究面からも認められていた。だが、1945年の終戦によって、その名誉と存在が凋落したのであった。中華民国期の作品の中に、後に米国で英語に翻訳したり書き換えた作品がある。後世の名著は、主にこの時期に執筆したものが多くを占めている。

2. 空白期：中国成立から改革開放まで（1949年から1980年まで）

新中国成立の1949年から1980年まで、大陸では張愛玲空白期となる。その頃は1942年の毛沢東の文芸講話に基づき、文学芸術は労働者と農民と兵士に奉仕することと、共産党の方針に従うことが方向づけられていた。この30年間は、兩岸それぞれに政治の変化が起こっていた。

1951年と1953年に出版された王瑤『中国新文学史稿』上下巻（北京・開明書店）と、1955年の丁易『中国現代文学史略』（北京・作家出版社）や1956年の劉綬松の『中国新文学史初稿』（北京・作家出版社）や、1979—1980年の唐弢編集『中国現代文学史』3冊（北京・人民文学出版社）のほか、当時の論文に、張愛玲は取り上げられていない¹⁴⁾。

古遠清¹⁵⁾はこのことについて、11の理由を挙げている。要約すると、1. 外曾祖父が売国奴の李鴻章で、貴族の血縁があり、作品が革命文学の要求と一致しない。2. 汪精衛政権の上級官吏と交際し、日本人とも関係があり、重大な政治歴史問題がある。3. 汪偽政府の宣伝部次長胡蘭成の「妻」であり、漢奸罪が適用される可能性がある。4. 彼女は自分がすべての潮流の外にあると言い、いかなるイデオロギーも受け入れないが、左翼の圧力に反感を持ち、プロレタリア文学を嘲笑したことがある。5. 張愛玲の作品の多くは日本の偽政府系統の刊行物に発表されていた。新文学史に逆流する鴛鴦蝴蝶派の刊行物に発表された作品もある。6. 大陸の赤色政権に不満を抱き、人民が主人公になる政権が合わず、香港へ

¹²⁾ 譚正璧「論蘇青及張愛玲」『風雨談』第16期、1944年12・1月、p2407。／譚正璧前掲「論蘇青及張愛玲」陳子善編『張愛玲の風氣：1949年前的張愛玲評説』、p44。

¹³⁾ 張惠苑編『張愛玲年譜』天津人民出版社、2014年1月、p65。／古遠清「海峽兩岸『看張』的政治性和戲劇化現象」林幸謙編『張愛玲：文學・電影・舞台』牛津大學出版社、Oxford University Press Hong Kong、2007年、p216。

¹⁴⁾ 王宏志前掲「張愛玲与中国大陆的現代文學史書寫」、pp251-252。p284。／古遠清「海峽兩岸『看張』的政治性和戲劇化現象」p207。

¹⁵⁾ 古遠清（1941年—）武漢大學中文科を卒業し、現在、中南財經政治大學台灣香港文學研究所所長を務める。維基百科より抜粋。

逃亡し、資本主義に憧れた。7. 外国と内通し、香港のアメリカ新聞処 (United States Information Agency) に勤務し、台湾国民党の反共小説を翻訳し、祖国を裏切っていた嫌疑がある。8. 香港のアメリカ新聞処の支援と指導のもとで、2冊の反共小説『秧歌』『赤地之恋』を出版した。9. 日和見主義者で、祖国救亡の時に何もせず、抗日と関係ない「末世の荒涼感のある『プチブルジョア』を心に込めた」作品を書いており、共産主義の後継ぎにふさわしくない。10. 道徳教訓を蔑視し、文学作品の教育作用に反対し、芸術のための芸術と主張している。『秧歌』は中国の大陸の文芸政策を誹っており、毛沢東の延安文芸講話の精神に反する。11. 張愛玲を称賛する人々は、反共の文人か、あるいは新中国に好感を抱かない人である。たとえば、夏志清のような右翼の文人がいる¹⁶⁾。

このような政治的理由によって、張愛玲は文学史から無視されていた。40、50年代以降、毛沢東時代の中国文学史が片寄ったものであり、必然的に張愛玲が存在しなくなった。古遠清は大陸の文学のあり方の問題点を、張愛玲を通じて明らかにしたのであろう。

張愛玲は1952年に香港に出て、1955年秋に米国に渡っている。米国では夏志清が、1961年に *A History of Modern Chinese Fiction* 『中国現代小説史』(イエール大学出版) を出版し、その中で「今日の中国で最も優秀で最も重要な作家である」¹⁷⁾ と張愛玲を称賛し、高く評価した。

台湾では米国政治の影響を受け、反共文学・懐郷文学・現代主義文学が芽生える中で、張愛玲は『秧歌』と『赤地之恋』が反共小説とされたことによって受容されていた。

1979年に「全国第四次文代会」が開催され¹⁸⁾、文学への一方的な政治的支配が、反省の対象とされた。この大会は、文芸政策の転換を示す代表大会であり、それ以後、文学研究のタブーが取り払われ始めた。このように米ソ冷戦下の政治状況で、張愛玲は大陸で30年の長きにわたり無視されていたのである。

台湾でも大陸でも、張愛玲は文学世界を描いたことよりも、政治的存在理由によって、評価または無視されていた。

3. 復活期：改革開放政策から六四まで (1981年から1989年まで)

1981年に鄧小平が香港の「一国二制度」を提起する。改革開放政策のもとに、中国が世界デビューを果たし、第2次天安門事件(六四)が発生するまでの時期である。1972年に、米国が中国を正式な政権と認めてから、米中関係は大きく変化していた。

1981年11月に張葆莘の「張愛玲伝奇」が『文匯月刊』にはじめて、取り上げられた¹⁹⁾。「たとえ、張愛玲が書いたのはほとんど“仲が悪い配偶者”一不幸な婚姻であったとしても、彼女の小説は“鴛鴦”

16) 古遠清前掲「海峽兩岸『看張』的政治性和戲劇化現象」, pp205-207.

17) *A History of Modern Chinese Fiction in Chinese* / 劉紹銘等訳『中國現代小説史』香港大學出版社, 2001年, p335.

18) 劉知萌前掲「文学史中的張愛玲—从1949到2009」, p86.

19) 王宏志前掲「張愛玲与中国大陸的现代文学史书写」 p252, p285. / 張葆莘「張愛玲傳奇」『文匯月刊』1981年11月, p36-40. / 張葆莘「張愛玲傳奇」『南北極』龍門文化事業, 第140期, 1982年1月, pp63-66.

でない以上、「胡蝶」でもない²⁰⁾と述べた。中国国内だけでなく、台湾、米国などの海外文壇での評価も取り上げ、渡米後の作品と生涯にも言及している。

張愛玲の40年代の文学活動について、現代文学史に記述すべきであり、彼女を無視するのは、公正妥当なことではないとし、その理由として、張愛玲が被占領時期の上海の人々の生き様を小説に描いた代表的な作家であると言う。抗日戦争期の被占領地域の文学は、評論家の注目を浴びず空白であるが、研究対象とすべきであると主張する²¹⁾。

その後、1982年に顔純鈞が「評張愛玲的短篇小説」で、趙園が「開向滬港洋場社会的窗口」で、新文学の「主流」と異なる「性質」に注意して、当局の反応を意識しつつ神経を使いながら張愛玲を肯定した²²⁾。

趙園は「思想と生活の窮迫が、思想と生活によって補われただけで、張愛玲の小説の芸術上のいくつかの成功は、依然として、新文学創作者に役立ち参考となる。」²³⁾と述べる。

それに続き、1985年に柯靈が「遥寄張愛玲」を『讀書』（1985年4月第4期）と『収獲』（1985年5月第3期）に掲載して、広く注目をあつめるようになった²⁴⁾。

1980年代の中期は、方法論の時期として、人々は張愛玲を論ずる時、小説手法の特異、意象、象徴及び心理分析等が行われていた²⁵⁾。

それから、唐文標が「一級一級走進没有光的所在」を書く。唐文標は「張愛玲の世界」に戻ると、我々はその世界が小さすぎて、特殊すぎて、我々の世界とは日々遠ざかり、何の助けとなるのであろうか²⁶⁾と疑問を挙げる。

宋家宏が「張愛玲的『失落者』心態及其創作」を發表し、張国禎が「張愛玲啓悟小説的人性深層隱密与人生觀照」を著し、深い人間性（ヒューマニズム）の内包に触れて、「現実を反映」する角度から価値を肯定することに留まらず、創作の現代的特徴に突破口を開き、張愛玲研究が重要視される論文となった²⁷⁾。

特に宋家宏は、彼女の不幸な子ども時代、没落した家庭、動揺した現実が、彼女を失落者とし、複雑な心の矛盾した内面をもたらしたと、「“失落者”の基本的心理状態が、精神上的の悲觀氣質を導いた」²⁸⁾

20) 張葆莘前掲「張愛玲伝奇」『文匯月刊』, 1981年11月, p37.

21) 張葆莘前掲「張愛玲伝奇」『文匯月刊』, 1981年11月, p40.

22) 溫儒敏「近二十年來張愛玲在大陸的『接受史』」蘇偉貞編選『張愛玲的世界・續編』台北・云晨文化實業股份有限公司, 2003年11月, pp142-143, p152.

23) 趙園「開向護, 港“洋場社会”的窗口—讀張愛玲小說集《傳奇》」子通, 亦清主編『張愛玲評說六十年』中国華僑出版社, 2001年8月, p413.

24) 王宏志前掲「張愛玲与中国大陆的現代文學史書寫」(p253, p285)では、柯靈「遥寄張愛玲」は『香港文學』第2期1985年掲載(pp53-57), と書く。溫儒敏前掲「近二十年來張愛玲在大陸的『接受史』」, p143.

25) 溫儒敏前掲「近二十年來張愛玲在大陸的『接受史』」, p144.

26) 唐文標「一級一級走進没有光的所在」子通, 亦清主編『張愛玲評說六十年』中国華僑出版社, 2001年8月, p297. / 唐文標「一級一級走進没有光的所在」『張愛玲研究』聯經出版事業公司, 1983年, p64.

27) 溫儒敏前掲「近二十年來張愛玲在大陸的『接受史』」, p144.

28) 宋家宏「張愛玲的“失落者”心態及創作」子通, 亦清主編『張愛玲評說六十年』中国華僑出版社, 2001年8月, p414.

と書く。

文学史では、1984年6月に、空白期以後はじめて黄修己が『中国現代文学簡史』（北京・中国青年出版社）で張愛玲を取り上げた²⁹⁾。続いて1987年3月に 錢理群・呉福輝・温儒敏・王超冰が『中国現代文学三十年』（上海文芸出版社）³⁰⁾で張愛玲に言及した。

黄修己は『中国現代文学簡史』の第17章「為民族解放而戰的抗戰文艺運動」にて、張愛玲を文学史上に書き入れたのである。その内容は、「多くの恋愛・結婚を巡って、都市の上流階級の人を表現」「女流作家凌淑華と比べると、『町の俗っぽさが多く描かれ、格調も高くない』」「敵の偽政府統治下に生きながらえる者の失意の極致の精神状態」³¹⁾「これはすでに人民革命の嵐が吹き荒れた後、彼女の思想が反動に向かうことが予想されていた」³²⁾と記している。「格調があまり高くなく、未来の不正確な政治傾向を持っている」³³⁾と述べる。

『中国現代文学三十年』は、第28章「在荆棘中潜行的“孤島”和淪陷区文学」の「上海“孤島”和淪陷期文学」において、「この女流作家はとても良い芸術の素質があるが、彼女の政治的立場によって隠されている」³⁴⁾「金銭が人間性を壊滅させる不満と、封建家庭の専制への憤り、もう一方は、旧生活への懐古と強烈な階級没落感がある」³⁵⁾「西洋化の環境の中で、依然として頑固に存在する中国封建の靈魂があるばかりである」³⁶⁾と記す。『二十世紀中国文学』に「西洋のいわゆる現代文明と東洋の古くて廃れ朽ちる封建文化がかなり荒唐無稽と一緒に結合して、張愛玲小説の礎石を構成している」³⁷⁾と述べる。

これを契機に、出版界は張愛玲を取り巻く複雑な政治に気を使いながら、人民文学出版社が1986年に『伝奇』を底本刊行し、1987年に上海書店が『流言』を影印出版し、寧夏人民・百花文芸・広州花城・広西人民などの出版社からも張愛玲の小説作品が出版された³⁸⁾。

女性学の視点からの研究として特筆すべきなのは、孟悦・戴錦華の『浮出歴史地表』（中国人民大学出版社）³⁹⁾である。その第14章「蒼涼的莞爾一笑」では次のように、母娘関係が上手くいかず、母子間

29) 王宏志前掲「张爱玲与中国大陆的现代文学史书写」p273. / p292には、黄修己『中国新文学史编纂史』, pp232-233, とある。

30) 王宏志前掲「张爱玲与中国大陆的现代文学史书写」, p253. p286. / 『中国現代文学三十年』上海文芸出版社, 1987年3月, pp586-587. / 温儒敏前掲「近二十年來張愛玲在大陸的『接受史』」, pp143-144, p152. 『中国現代文学三十年』の初稿は1984年『陝西教育』雑誌に掲載され、1987年6月に上海文芸出版社から出版されたという。

31) 黄修己『中国現代文学簡史』中国青年出版社, 1984年6月, p354. / 王宏志前掲「张爱玲与中国大陆的现代文学史书写」p274.

32) 黄修己『中国現代文学簡史』中国青年出版社, 1984年6月, p355. / 黄修己『中国新文学史编纂史』北京大学出版社, 1995年, p126. / 刘知萌前掲「文学史中的张爱玲—从1949到2009」, p86.

33) 刘知萌前掲「文学史中的张爱玲—从1949到2009」p86.

34) 钱理群他『中国現代文学三十年』上海文芸出版社, 1987年3月, p586.

35) 前掲『中国現代文学三十年』pp586-587. / 王宏志前掲「张爱玲与中国大陆的现代文学史书写」p275, p293.

36) 前掲『中国現代文学三十年』p587.

37) 原文は「…(略)…締造出一个又一个“文化畸形儿”」(ひとつ又ひとつと“文化奇形児”を創造している)。乔福生, 谢洪杰主编『二十世紀中国文学』杭州大学出版社, 1992年12月, p261. / 王宏志前掲「张爱玲与中国大陆的现代文学史书写」p275, p293. 金欽俊他『中華新文学史』上巻(広東高等教育出版社, 1998年)p221.

38) 温儒敏前掲「近二十年來張愛玲在大陸的『接受史』」, p145.

39) 孟悦, 戴錦華「蒼涼的莞爾一笑」『浮出历史地表』中国人民大学出版社, 2004年7月. / 『浮出历史地表』の初版は、河南人民出版社, 1989年7月である。河南大学の李小江はジェンダー研究のトップであった。

に距離があった彼女の文学世界を評している。

「張愛玲の消失していく世界の中で、男性は夢がない人種である」「男性は、張愛玲の中ではただ頹廢王国の物質的存在である。一（略）一張愛玲の世界はとどのつまり女性のもので、女性についての世界なのである。しかし、馮沅君の「五四」時代の描写する母娘のつながりではなく、謝冰心の幸せな『母娘一体』のひとつときでもない。母親と娘たちの間には、お互いに形容しつくせない溝と恨みがある。彼女たちは、それぞれが滅びゆく古い邸宅の片隅に立ちつくし、冷たく相手を凝視するのみである」⁴⁰⁾

伝統中国の中の男性を軽視し、女性の世界を描くが、母娘関係は断絶しているのである。

80年代以後、文壇では文学批評の流派が多数出現し⁴¹⁾、1980年代から90年代にかけて、大量に出版されて流通し、読者が増加し、張愛玲ブームが起こった。1980年代初めに、大陸において「出土文物」のように、再発掘されたのである。

一方台湾では、民主化が加速的に進み、女性文学・多元化文学の時代を迎える中で、張愛玲は“三三”作家⁴²⁾に重視され、ますます不動の地位を築いていた。

4. 拡大期（1990年から1999年まで）

六四事件以後、中国は政治的引き締めの時期に入る。経済的に改革開放が進んで、中国が世界市場にプレゼンスを高めていく。1990年に北京アジア競技大会が開催され、中国が世界の注目を浴びていた同時期、台湾では民進党が「台湾の主権独立」を採択する。1995年には、北京で世界女性会議が開催され、ジェンダーへの認識が高まった。

1992年に4冊の『張愛玲文集』（安徽文芸出版社）が出版された。そして人々の関心が徐々に張愛玲の伝奇的な人生に注がれるようになる。

1990年からの張愛玲ブームを受けて、1992年から1995年にかけて、王一心・于青・阿川・余斌の4名の伝記が出版された。張愛玲という人物への関心の高まりの現れである。

台湾では1990年代に「名著選定」⁴³⁾を経て、張愛玲は一種の「文化記号、(原文:文化符號)」となり、商業と結びつき、90年代の特別な文化現象となる⁴⁴⁾。1994年の『中国青年報』で、張愛玲は第8位の作

40) 孟悦、戴锦华「苍涼的莞尔一笑」『浮出历史地表』中国人民大学出版社、2004年7月、p239。

41) 刘知萌前掲「文学史中的张爱玲—从1949到2009」, p87。

42) 1970年代の台湾文壇は、「郷土文学にあらずば、張愛玲と胡蘭成」という状況だった、と劉紹銘が述べる。1977年に創刊された三三集刊は、朱西寧、朱天文、朱天心のメンバーに支えられ、張愛玲と胡蘭成の影響を強く受けている。陳芳明著、下村作次郎他訳『台湾新文学史・下』東方書店、2015年12月、pp188-189。

43) 1991年1月、聯合報系主催の「台湾文学名著（原文:「經典」）選出會議」で153冊の名著の中から、投書によって30冊が台湾文学の名著として選ばれた。張愛玲の『半生緣』がランク入りしたが、論争が起こった。

44) 溫儒敏前掲「近二十年來張愛玲在大陸的『接受史』」, pp147-148。

家としてランク入りをする⁴⁵⁾。たとえば、1984年に香港映画「傾城之恋」、1990年には香港「滾滾紅塵(Red Dust)」, 1994年台湾と香港の合作映画「赤い薔薇 白い薔薇」が製作された。

張愛玲が1995年9月に米国ロサンゼルスで亡くなる。するとメディアが活発に報道を行い、学術界でも再度ブームが起きて、一般大衆の読者にまで受容が拡大した。⁴⁶⁾

張愛玲の受容は復活期に文芸批評から始まり、作品が復刊され読者が増加し、拡大期に人々の関心が作品への興味から作者の人生へと広がり、伝記の出版に結びついた。そして、改革開放の波に乗りながら、著作の出版や研究から注目された。逝去後に再度ブームが起こり、一般大衆にまで浸透していった。

5. 安定期：(2000年から2008年まで)

中国が2002年にWTO(世界貿易機関)に加入し、2008年に北京オリンピックを成功させ、神州7号の宇宙飛行が、世界にニュースとして大きく報道される。兩岸は、2005年に50年ぶりに、連戦国民党主席と、胡錦涛共産党総書記の国共首脳会談が実現した。

研究面において、百花繚乱の文芸批評の時代を経て、構造主義叙事学・精神分析・女性主義などの影響を受けた批評がますます盛んになった⁴⁷⁾。

2000年7月に程光煒主編『中国現代文学史』(人民出版社)が出て、下編第17章にて「低気圧」時代の『伝奇』と『小説』として取り上げる。

2007年には3冊の文学史が出版されている。朱棟霖・朱曉進・龍泉明編集『中国現代文学史1917—2000(上)』(北京大学出版)⁴⁸⁾、鄭万鵬『中国現代文学史』(華夏出版社)⁴⁹⁾、楊義『中国現代小説史(3)』(中国社会科学出版社)⁵⁰⁾である。

まず、朱棟霖他『中国現代文学史1917—2000(上)』(北京大学出版)⁵¹⁾では、第17章の「40年代小説(一)」の第3節にて、張愛玲を3頁以上にわたり取り上げる。経歴と散文、『傾城之恋』『金鎖記』に言及し、『秧歌』『赤地之恋』を「反共」作品とする。「40年代上海の淪陷区(被占領地域)で最も人気があった女流作家である」⁵²⁾と述べる。

鄭万鵬は、『中国現代文学史』(華夏出版社)第6章「張愛玲:植民地語境下的個人人性」で、「彼女は「乱世」と親しむ一外からの侵略による「乱世」を含む真空状態と親しむ」⁵³⁾と述べる。

楊義『中国現代小説史(3)』(中国社会科学出版社)は、第6章「上海孤島及其後の小説」の第4節「洋場社会的仕女画家」で、15頁にわたって取り上げ、張愛玲の文筆は自由自在に流暢に流れ、想像力が

45) 溫儒敏前掲「近二十年來張愛玲在大陸的『接受史』」, p148.

46) 溫儒敏前掲「近二十年來張愛玲在大陸的『接受史』」, p149.

47) 刘知萌前掲「文学史中的张爱玲——从1949到2009」, p87.

48) 朱棟霖, 朱曉進, 戎泉明主編『中国現代文学史1917-2000(上)』北京大学出版社, 2007年1月第1版, pp290-293.

49) 鄭万鵬『中国現代文学史』華夏出版社, 2007年1月第1版, pp64-68.

50) 楊義『中国現代小説史(3)』中国社会科学出版社, 2007年1月第1版, pp326-341.

51) 朱棟霖, 朱曉進, 戎泉明主編前掲『中国現代文学史1917-2000(上)』, pp290-293.

52) 朱棟霖, 朱曉進, 戎泉明主編前掲『中国現代文学史1917-2000(上)』, p291.

53) 鄭万鵬前掲『中国現代文学史』, p68.

豊富であると言語の魔術の特徴を述べ、「彼女は古今のイメージで、中国と西洋の境界が錯綜するところに、変化に富む多くの物寂しさや、不安な租界地のの上流階級の女性図を描いた」⁵⁴⁾と書く。

2007年1月にでたこれら3冊、朱棟霖他『中国現代文学史 1917—2000（上）』、鄭万鵬『中国現代文学史』、及び楊義『中国現代小説史（3）』の文学史は、それぞれ単独で、かなりの分量にわたり、張愛玲について記載しており、客観的で正当な自然な評価がされていると感じる。

それ以降、2008年に唐弢主編の『中国現代文学史簡編（増訂版）』（復旦大学出版社）の第13章「抗日和解放戦争時期的文学創作（二）」では、6頁にわたり紹介される。「（張愛玲は）狭義の新感覚派の作家ではないが、モダニズム（現代主義）を実践する集大成者といえるかもしれない」⁵⁵⁾と言う。

もはや、中国現代文学史では、張愛玲を入れて当然であり、政治的偏見によってその存在が排除されることはなくなり、冷静に歴史を直視して、孤島（被占領地区）の文学として、彼女の立場と作品の魅力を評価しようとする姿勢がみられるようになったといえよう。もう珍しい存在ではなくなったのである。

このように安定期に、張愛玲が多くの文学史に堂々と取り上げられ、詳細に記述されるようになった。

その他「半生縁」は2003年と2017年に、「金鎖記」は2004年に、「傾城之恋」は2010年にそれぞれテレビで連続ドラマで放映された。それぞれVCDやDVDが販売されている⁵⁶⁾。中国で市場経済が急激に発展していく中、張愛玲はメディア・映像を通しながら「文化符号」として消費され、人気を維持していた。

6. 再認識期：発掘作品の出版（2009年から2017年まで）

2010年に上海万博を成功させ、GDPが日本を追い抜き、米国に次いで世界第2位になる。世界デビューに成功し、大きな存在感を持つようになった。

この時期は、張愛玲研究に新しい局面を迎えるターニングポイントとなる時期である。

張愛玲の過去の作品が出版されただけでなく、伝記や研究書なども続々と出版され、彼女の立場は揺るがなかった。さらに2009年以降、生前に出版されなかった発掘作品が次々と出版されるようになった。そのため、新しい張愛玲のイメージ、評価を再構築しなくてはならなくなった。

2009年に自伝的小説『小団円』が出版されると、すぐベストセラーとなり、香港・台湾や中国大陸を席卷する話題作となった⁵⁷⁾。しかし、『小団円』に対する評価は、毀誉褒貶が激しく一定せず、應鳳凰

⁵⁴⁾ 楊義前掲『中国現代小説史（3）』、p341。

⁵⁵⁾ 唐弢主編『中国現代文学史簡編（増訂版）』復旦大学出版社、2008年4月第1版、pp320-325、p325。／1984年3月に人民文学出版社から出版された唐弢主編『中国現代文学史簡編』の中では張愛玲に言及していない。

⁵⁶⁾ 「金鎖記」VCD、遼寧文化芸術音像出版社、2003年。「半生縁」DVD、深圳市激光節目出版社、2003年。「色、戒」DVD、北京東方影音公司、2007年。「上海往事」DVD、湖南金峰音像出版社、2008年。「傾城之恋」DVD、齊魯音像出版社、2009年。

⁵⁷⁾ 泉京鹿「『一族』と『家』の重さ、ささやかな幸せ」朝日新聞2009年6月8日、グローブ（GLOBE）17号、北京の書店から、http://globe.asahi.com/bestseller/090608/01_01.html
<http://database.asahi.com/library2/topic/t-detail.php>。

の張愛玲の文学史上の位置づけを変えるべきという主張さえ見られた⁵⁸⁾。張愛玲が、作家の実像以上に持ち上げられてしまったかもしれないと、冷静な評価をする意味であろう。

この時期には、生前に未発表であった5つの作品が、相次いで出版された。2009年に『小團圓』が、台湾・香港・大陸で出版され、2010年に『The Fall of the Pagoda (雷峯塔)』⁵⁹⁾と『The Book of Change (易経)』⁶⁰⁾の張愛玲の英文原文と翻訳者の中国語訳が香港・台湾から出版された。

台湾では、2010年4月『皇冠』674期に「異郷記」が掲載され、同年12月に大陸から『異郷記』（北京十月文芸出版社）が出版される。『小團圓』と『The Fall of the Pagoda (雷峯塔)』『The Book of Change (易経)』の3冊は「自伝3部作」と称される。2014年9月には『The Young Marshal (少帥)』⁶¹⁾が台湾・皇冠文化出版有限公司から出版された。

2010年6月の嚴家炎編著『二十世紀中国文学史・中冊』（北京・高等教育出版社）⁶²⁾では、第20章「抗戦时期的中国淪陷区文学」の第5節「張愛玲及其“反伝奇的传奇”」の中で10頁以上にわたり記述する。渡米後は「昔の夢をもう一度見ようとしたが、かつての成功を再度叶えることはできず、生活がさらに閉鎖的になり、趣味も偏狭的になり、一（略）一もはや人に新鮮さと美的感覚を与えることができなかった。一代の才女の伝奇は、ただ良い出だしで始まったが、ついに円満な結末を迎えることができなかった。本当に傅雷の言う不幸が的中した形となった」⁶³⁾と書く。張愛玲の渡米後の生活と精神状態を含めて、彼女の生涯全体を見つめなおす視点が見られる。

2000年に出た程光煒主編『中国現代文学史』は2011年に第3版になり、『中国現代文学史（第3版）』（北京大学出版社）の第17章「張愛玲、錢鐘書及淪陷区作家」第1節「張愛玲与乱世传奇」では、「張愛玲のもつのは“悲しみ哀れ”の感嘆であり、魯迅のような“反抗”はない」⁶⁴⁾と、有名な文学家魯迅と比較する。「1943年から1944年にかけて上海ではかなく消え去ったもの、これは彼女本人に対してだけでなく、中国現代文壇についても、ささやかではなかったひとつの奇跡である」⁶⁵⁾とも書き、短い時期であったが、中国文壇で確実に存在感を残した奇跡を承認している。

2014年6月の朱棟霖主編『中国現代文学史 1917—2012（上）第2版』⁶⁶⁾では、2007年と同様に単独で3頁ほど記載する。

58) 應鳳凰「張愛玲『小團圓』毀譽參半—《小團圓》印證了張愛玲作品的文學屬性：她是頭號鴛鴦蝴蝶派」『明報月刊』2009年4月，pp111-112。

59) Eileen Chang『The Fall of the Pagoda』Hong Kong University Press, 2010年。／張愛玲著，趙丕慧訳『雷峯塔』皇冠文化出版有限公司，2010年9月。

60) Eileen Chang『The Book of Change』Hong Kong University Press, 2010年。／張愛玲著，趙丕慧訳『易経』皇冠文化出版有限公司，2010年9月。

61) 張愛玲『The Young Marshal (少帥)』皇冠文化有限公司，2014年9月。

62) 嚴家炎主編『二十世紀中国文学史・中冊』北京・高等教育出版社，2010年6月，pp389-401。

63) 嚴家炎主編前掲『二十世紀中国文学史・中冊』，p401。

64) 程光煒，刘勇，吴晓东，孔庆东，郜元宝『中国現代文学史（第3版）』北京大学出版社，2011年10月第1版，p297。

65) 同上。

66) 朱棟霖，朱晓进，吴义勤主編『中国現代文学史 1917-2012（上）第2版』北京大学出版社，2014年6月第2版，pp310-312。／2007年1月の第1版は「1917年から2000年まで」（pp290-293），2014年6月の第2版は「1917年から2012年まで」（pp310-312）と年代区分と記載頁が異なるが，内容は同じである。

特筆すべきは、2015年3月に出版された『台湾女性文学史・精装』（厦門大学出版社）⁶⁷⁾の中で、張愛玲が“三三集刊”で閩秀文学の著者たちに尊重され、大きな影響を与えた記載である。閩秀文学とともに、メディアの助けを借り、改めて張愛玲が受け入れられ、外省人を通して台湾文学に受け入れられた⁶⁸⁾。

台湾では、2011年に高雄出身の台湾主義（原文：「本土化」）論者の陳芳明が『台湾新文学史』（台湾・聯経出版）に記載し、2015年2月に馬森が『世界華文新文学史（上編・中編・下編）』（台湾・印刻文学叢書）で多くの箇所を取り上げる⁶⁹⁾。

中国大陸の文学史と、大陸で出版された台湾女性文学史でも、台湾の文学史でも、張愛玲は記述されて当然の存在となった。張愛玲は、政治的偏見にとらわれることがなく、冷静で客観的な評価を得られるようになった。

ただし、反共小説と誤解された2冊の『秧歌』と『赤地之戀』は、中国で未だに出版されない現実がある⁷⁰⁾。これは、張愛玲はタブー視されなくなったが、一部の作品には思想的問題が残っていることを表している。

2016年9月に馬小塩は「張愛玲は存在する意義があるが、夏志清が褒め称えるほど高くはない」⁷¹⁾と述べる。冷静な評価が行われるようになった一例であろう。

III. 東方書店とCNKIでのヒット件数から見える張愛玲研究

1. データベースとヒット件数

東方書店（本の情報館）とCNKI（中国学術文献網路出版総庫の中国期刊全文データベース）を母集団として、それぞれから「張愛玲」等の語彙を入れて検索してヒットした件数を、文学史の時期区分に合わせて、表1を作成した。

東方書店は50年以上の歴史を有する千代田区神田神保町にある中国書籍専門販売書店である。そのネット上にある「中国本の情報館」の1981年から2017年10月26日までの中国・香港・台湾の輸入書のみデータを母集団とした。映像作品は含まれていないが、CDオーディオブックを1件含む。

CNKIは、中国大陸で発行されている学術雑誌、新聞、学術論文、学術学会などが検索できる。今回

67) 林丹娅主编「第9章1980年代的台湾女性文学」『台湾女性文学史』厦門大学出版社，2015年3月，pp369-371，p370。

68) 『台湾女性文学史・精装』厦門大学出版社，2015年3月，pp369-373。

69) 鈴木基子前掲「張愛玲と台湾文学史」『研究紀要』第82号，pp8-9，p26。

70) 『秧歌』は1954年7月に香港・今日世界出版社から出版された。1968年，1991年，1996年，2001年，2010年に皇冠文化出版有限公司から出版された。『赤地之戀』は，1954年10月に香港・天風出版社から，1976年12月に香港・現代出版社から，1978年1月に台湾・慧龍出版社から出版された。1991年，2001年，2010年に皇冠文化出版有限公司から出版された。

71) 馬小塩「張愛玲神话流傳史—謹以此文獻給張愛玲誕辰96周年」2016年9月29日，『文化先鋒』

<https://mp.weixin.qq.com/s/iv29MP7ra5dFiXcMRjNfkw>

「在中国文学史上，張愛玲有她的意义所在，但非如夏志清所捧之高。」

期	時期区分	西暦 ○年から○年	東方（本の情報館）				CNKI（中国データベース）			
			全体	中国	香港	台湾	論文全体	『秧歌』	『赤地之恋』	『小団円』
1	中華民国期	1942—1948								
2	空白期	1949—1980								
3	復活期	1981—1989	2			2	50	2	5	
4	拡大期	1990—1999	71	41	5	25	664	7	23	1
5	安定期	2000—2008	97	80	1	16	3440	11	47	9
6	再認識期	2009—2017/10/14	178	134	9	35	5885	34	118	342
	合計件数	1942—2017/10/14	348	255	15	78	10039	54	193	352

表 1：文学史時期区分における東方書店（本の情報館）と CNKI（中国期刊全文数据库）の張愛玲語彙での検索ヒット件数

は、中国期刊全文数据库（1915 年から 2017 年 10 月 14 日までの 60559477 件の論文）を母集団としたデータである。1990 年代以前の収録雑誌を網羅していない可能性があることを承知の上で、傍証として検索データを使用する。

東方書店データベースのヒット件数では、中国は 255 件あった。255 件のうち拡大期 41 件、安定期 80 件、再認識期 134 件と、確実に大陸での出版件数が、増加していた。香港では、それぞれ、5 件、1 件、9 件、台湾では、25 件、16 件、35 件と、大陸での安定期に、香港と台湾で伸びていない。それは東方書店のデータベースが 1981 年からであるため、香港・台湾で 1960 年から 1970 年代に何度かあった張愛玲ブームが反映されていないからであろう。

中国は、拡大期 41 件から安定期 80 件と 2 倍になり、再認識期 134 件では、拡大期の 3 倍以上になった。全体では、復活期 2 件、拡大期 71 件、安定期 97 件、再認識期 178 件であった。合計では、1981 年からの 348 件中、中国が 255 件で、香港・台湾で 93 件であった。

東方書店にみる張愛玲関連輸入書籍が、時間の経過に従い伸び続け、特に再認識期に増加してきた。張愛玲の人気と注目度を確認することができる。

東方書店のデータベースによると、中国・香港・台湾も、関連著作の出版が 30 年もの長きにわたり、増加しており、張愛玲自身の著作だけでなく、張愛玲関連の伝記、評論、書簡集などの出版物が非常に人気があることがわかる。この時期は中国が世界にプレゼンスを高めた時期である。つまり安定期と再認識期に、大陸での張愛玲関連の書籍出版の増加が著しい。

CNKI の論文ヒット件数の内訳は、復活期が 50 件、拡大期に 664 件、安定期に 3440 件、再認識期に 5885 件を占める。論文ヒット件数は復活期から拡大期に 13 倍以上になり、拡大期から安定期は、5 倍以上に増え、再認識期の件数が全体の半分以上を占める。1995 年の逝去前までは、264 件と全体の 3% を占め、1996 年以後になると、9775 件と圧倒的多数を占める。大陸での学術論文件数において、張愛玲研究は張愛玲の生前に非常に少なく、ほとんどが死後に急激に増加していることがわかる。

中国でデビューした張愛玲が、海外華僑華人と台湾でしか存在を認められない長い 30 年の空白期を経て、中国大陸で復活をしてから、研究対象として認められ、死後に急激に張愛玲研究が飛躍的に拡大

してきたことが数字から判明した。

『秧歌』と『赤地之恋』は、中国大陸ではいまだに出版されていないが、CNKIの論文語彙検索によると『秧歌』は54件、『赤地之恋』は193件がヒットした。『秧歌』54件のうち49件と9割が、『赤地之恋』193件のうち184件とほとんどが、1996年以降の研究である。1995年の逝去が研究件数増加のひと区切りとなっていることがわかる。また、張愛玲の『秧歌』の研究が『赤地之恋』の4分の1弱と少ない。現在、「反共小説」とされた2冊の小説について、研究領域では以前ほどタブー視されなくなってきたのではないかと、言えよう。

2. 発掘作品の出版について

近年、未完の『同学少年都不賤』、『異郷記』、『小団円』『The Fall of the Pagoda (雷峯塔)』『The Book of Change (易経)』『The Young Marshal (少帥)』が発見されて出版され、読者の強い関心を引きしている。なかでも、中国語で書いた『小団円』は一番注目を浴びている。

ベストセラーで話題作となった『小団円』の検索データをみている。2018年2月15日現在CNKIの10517件の張愛玲文献の中から、『小団円』を主題として検索し352件の論文がヒットした⁷²⁾。張愛玲研究論文数の中で、『小団円』の研究数は、3.4%を占める。1990—1999年拡大期1件、2000—2008年安定期9件、2009—2017年再認識期342件であった。近年は毎年20数件から30数件と安定している傾向がある。

『小団円』が3月に台湾で、4月に中国大陸でというように、ほぼ同時に出版されたのが、2009年であった。その年は皇冠文化出版有限公司55周年であった。2010年に『The Fall of the Pagoda (雷峯塔)』と『The Book of Change (易経)』が出版された。その2010年は張愛玲生誕90年で逝去15周年にあっていた。これらは、自伝3部作と称される。

2014年に『The Young Marshal (少帥)』が出版されたことにも大きな意味があろう。2014年は皇冠文化出版社60周年記念であった。『The Young Marshal (少帥)』は、幻の作品と言われていた未完成原稿だが、そこには大陸の軍閥で台湾に渡った張学良の愛が描かれている。

出版社の創業記念事業の〇〇周年と、張愛玲の生誕或いは逝去〇〇周年と出版が重なっており、意味を持たせていることが伺える。

IV. 中国文学史の変遷のまとめ

大陸の文学史での張愛玲の受容について、以上の6期をあらためて振り返ってみる。

張愛玲は中華民国の1940年代に華々しくデビューし一世を風靡したが、終戦によって漢奸の汚名を着せられた。1949年中華人民共和国が成立してから1980年までの空白期は、大陸では毛沢東の文芸講

⁷²⁾ 2018年2月15日現在のCNKI検索数である。再認識期の詳細内訳は、2009年90件、2010年48件、2011年43件、2012年25件、2013年21件、2014年32件、2015年33件、2016年23件、2017年27件。

話を元にした政治的要因で、張愛玲は文学史上30年間、存在が無視されていた。

1981年改革開放政策から1989年天安門事件までの復活期に、張愛玲は1981年にまず論文で復活し、それから1984年に黄修己の『中国現代文学簡史』（北京・中国青年出版社）と、1987年に銭理群等の『中国現代文学30年』（上海文芸出版社）で取り上げられた。それが契機となり、1980年代から90年代まで、小説集と散文集、及び関連書籍の出版が大量に行われ、張愛玲ブームが巻き起こった。

1990年から1999年までの引き締め政策のもとの拡大期において、1992年に4冊の『張愛玲文集』（安徽文芸出版社）が出版され、王一心・于青・阿川・余斌の4名の伝記が相次いで出版され、作品から張愛玲の人物の生きざまへの関心が強まっていく。1995年に張愛玲が亡くなると、メディアが盛んに放送し、再度、張愛玲ブームが起こった。

2000年から2008年の安定期は、中国が世界にプレゼンスを示した時である。2007年に出た朱棟霖、鄭万鵬、楊義などがそれぞれ編集する3冊の『中国現代文学史』に張愛玲を詳しく記載している。2008年の唐弢主編『中国現代文学史簡史（増訂版）』（復旦大学出版）も、単独で取り上げている。

張愛玲はもはや中国現代文学史の中に入れて当然になり、排除されることがなくなり、孤島期（被占領地区）の文学として立場と魅力が評価されるように定着した。中国でも市場経済の中で、「文化符号」として消費されるようになり、「半生縁」「金鎖記」が連続テレビドラマで放送された。

2009年からの再認識期には、張愛玲の発掘作品が続々と出版された。2009年から2010年にかけて、自伝3部作『小団円』『The Fall of the Pagoda（雷峯塔）』『The Book of Change（易経）』が出版された。2014年に「異郷記』『The Young Marshal（少帥）』が出版された。これら生前に未発表であった発掘作品の出現は、研究のターニングポイントである、新しい張愛玲のイメージと評価を再構築しなくてはならないであろう。

このように張愛玲が1981年に復活してから、すでに40年近くの時間が経過し、その間、世界情勢と中国が目まぐるしく変化した。それにつれて張愛玲に関する再評価がなされ、出版状況と研究が大幅に増加する方向に変化してきた。すでに2015年には、大陸も台湾も、政治的偏見に捉われることなく張愛玲を正々堂々と中国文学史に書き入れるようになり、張愛玲の文学史上の位置は揺るがなくなった、と言えよう。

東方書店（本の情報館）とCNKI（中国期刊全文数据库）からは、拡大期、安定期、再認識期と、飛躍的に著作と関連出版、及び論文数が増加してきた事実を確認することができた。タブー視された作品は出版されないが、研究はできるようになってきたと言えよう。

中国が国際社会で存在感を増し、国力を増強している時期の折々のニュースと、皇冠文化出版有限公司の創業記念事業〇〇周年と、張愛玲の生誕何周年が、張愛玲の生前未発表作品の出版とリンクしていることも見えてきた。

張愛玲は、デビュー後兩岸の政治に翻弄され、文学史に記述されるか否かについて紆余曲折を経たが、すでに名誉回復を果たし、中国文学史にも台湾文学史にも受け入れられ、今や学術研究界でも出版界でも一般大衆の間にも安定した存在感を誇り、冷静に不動の地位を築いていることが判明した。